4　尾張・三河の種痘史　補遺

○山田英雄[1]・山内一信[2]・高橋　昭[3]

ジェンナーの牛痘種痘は五十年後、極東の日本にもたらされ、急速に日本全国に広まり、西洋医学の導入に大きな触媒的役割を果した。日本全国への牛痘種痘普及の本格的ルートは蘭方医を介するルートであり、シーボルトは熱心に鳴滝塾に学んだ日本の医師たちに種痘の知識と実技を伝えた。しかし、活性痘苗の伝来はやや遅れ、嘉永二年（一八四九）六月に蘭館医モーニッケと佐賀藩医楢林宗建の協力により実現された。このモーニッケ痘苗はその年の内に大阪・京都・福井・名古屋および江戸に伝えられた。名古屋へは伊藤圭介の友人柴田方庵（長崎開業医・水戸出身）によって伝えられ、嘉永二年十一月二十二日、圭介の子とその近隣の子に接種された。柴田方庵はモーニッケより種痘法を伝授され、出身地の水戸藩公に痘苗を届けるべく帰郷する途次、名古屋に立ち寄り伊藤圭介に伝えたものである。伊藤圭介は痘苗を植え継ぎ、家に種痘所を設立した。これとは別に嘉永三年、名古屋の蘭方医鈴木容蔵が京都の医師長柄春竜から種痘法を習い帰郷し、十数名の名古屋の医師に伝授した。鈴木容蔵は外科が得意な蘭方医であったが、尾張の種痘普及には大きな貢献をした。嘉永五年（一八五二）八月、尾張藩種痘所が開設され、大河内存真、石井隆庵、伊藤圭介の三人が取締りとなった。この種痘所は山田町之内、広小路大津町より西六軒目の地に設置された。この種痘所開設は後の愛知医学校、現在の名古屋大学医学部への原点となった。「種痘所用留」や「尾張藩種痘記録」によると毎月種痘日が決められ、当番医師が種痘に当たり、午前九時より午後八時まで行われ、料金は定められていなかった。嘉永六年二月にはもう一つ、下御園町之内西側田島屋与左衛門持家に種痘所西所が設けられた。明治二年頃には、尾張全体から相当多くの受痘者があったが、このころの種痘料金は一児金六銭二厘五毛と記され、貧しい子供は無料であった。

以上のごとく、尾張の種痘普及は名古屋を中心に急速かつ組織的に推進されたが、その土台として伊藤圭介の先駆的業績（暎咭唎國種痘奇書の出版など）と尾張蘭方医の一致協力態勢があった。

三河における牛痘種痘の普及についてはまとまった資料はないが、この地域への種痘の普及も意外に早かったことが知られている。田崎哲郎教授の三河地区の蘭方医の研究報告によると、武田元順および山崎譲平の種痘活動を紹介している。武田元順は南設楽郡鳳来町の出身で、江戸の伊東玄朴の門下であり、帰郷（一八五九）して開業（豊川市）し、種痘の普及につとめた。彼は又愛知県会議員（初代議長）として地方政治史にも大きな功績を残している。山崎譲平は蘭方医ではないが、難波抱節（岡山）に種痘を習い、帰郷して種痘を三河山間部に安政二年から七年まで広めた人物であり、津具村民族資料館にその種痘資料が保存されている。西尾の蘭方医横田毅（シノブ）もまた、三河の種痘史上忘れてはならぬ人物であり、江戸で伊東玄朴に、長崎で松本良順に蘭学を学び、帰郷して開業し、藩医となり（一八六三）、種痘普及に励んだ。西尾町史によるとその数三十万人に及んだという。

最後に日本の種痘史上忘れてはならぬ人物に、利光仙庵（吉田藩の江戸詰医師）がある。中川五郎治がロシアより持ち帰った牛痘種痘の本を長崎の通詞馬場佐十郎が『遁花祕訣』として翻訳したが、刊行に至らなかったものを、仙庵が嘉永三年（一八五〇）に『魯西亜（オロシア）牛痘全書』と題して刊行した。この写本は現在豊橋市立中央図書館にだけ残っている。利光仙庵は安政七年（一八六〇）に吉田に帰り、領内各村に種痘を普及させた。利光仙庵の経歴については不明の点が多く今後の検討事項である。このように三河地域における牛痘種痘の普及は尾張とは無関係に独立して進められた様子が伺われる。

(1) 国立療養所中部病院
(2) 名古屋大学医学部附属病院医療情報部
(3) 東海中央病院